

社会参画を視野に入れた「身近な地域の調査」学習

御坊市立河南中学校
教諭 加賀 公司

【要旨】

これからの中学校社会科では、社会に参画しようとする意欲や態度を育てることが課題の一つになる。この課題に取り組むために、本研究では「身近な地域の調査」学習の新たなカリキュラム開発を進めた。地域のフィールドワークを軸にした単元を構想し実施する過程で、明確な主発問による形成的評価の活用、聞き取りに力点を置いた調査、班によるグループ学習が有効であることが確かめられた。また、このカリキュラムを実施することによって、生徒の地域に貢献しようとする意欲や態度を育成することができた。

【キーワード】

社会参画 聞き取り調査 社会認識・市民的資質の構造 明確な主発問 目標に準拠した評価 形成的評価

1 研究のねらい

本研究の目的は、社会に参画（注1）しようとする意欲や態度が育つ社会科のカリキュラム開発（注2）・授業改善にある。ここでいうカリキュラム開発とは、教材と教授法の両方を含む教育プログラムを作ることである。対象は中学1年生、分野は地理的分野、内容は身近な地域の調査とする。

現代社会において、人間関係が希薄化し（注3）、社会性の乏しい子どもたちの増加が指摘される（注4）。また、小学校から高等学校へと学校段階が上がるにつれて、家族や地域との関わりが減少している状況も明らかになっている（注5）。文部科学省中央教育審議会答申（2008）（※1）では、「身近な地域社会の課題の解決にその一員として主体的に参画し、地域社会の発展に貢献しようとする意識や態度をはぐくむこともますます必要」と提言されている。本県においては、和歌山県教育振興基本計画（2009）を策定し、「市民性を高める教育」（※2）を推進している。このように、「地域社会に主体的に参画する意識や態度」を育てることの必要性が様々なところで言われている。

新学習指導要領（2008）では、社会科の究極の目標は「公民的資質の基礎の育成」であり、今まで以上に踏み込んだ内容となっている。具体的には、「地理的分野 2 内容 （2）日本の様々な地域 エ 身近な地域の調査」にも反映されており、「地域の課題を見いだし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う」（※3）ことが追加された。

中学校学習指導要領社会「身近な地域の調査」より抜粋

(2) 日本の様々な地域

エ 身近な地域の調査

身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて地域の課題を見いだし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養うとともに、市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる。（※下線筆者）

中学校学習指導要領解説社会編（2008）の「身近な地域の調査」の項目には、従来の具体的な調査学習の方法とともに、社会参画の視点を重視して、身近な地域の調査の学習を進めることが新たに示されている（※4）。

これまでの「身近な地域の調査」学習の指導では、実際に地域に出て調査を行わない

学校が半数近いというデータ（注6）があり、取組としては不十分な面があると思われる。唐木（2008）は、実際に地域に出て調査を行ったとしても、「従来型の『調査・分析・発表』の授業では、社会参加は望めないであろう。」と指摘する一方で、『『身近な地域の調査』に関する授業で、社会参加と関連したどのような社会科授業が生まれることになるだろうか。大いに期待してみたいと思う。』と述べている（※5）。

2 研究仮説と研究構想の概要

研究の目的に基づき、本研究の研究仮説を以下の通り設定した。

社会科地理的分野「身近な地域の調査」学習で、実際に調査することを通して、地域の課題や将来像が考えられるカリキュラムを開発し実施すれば、社会に参画しようとする意欲や態度が学習者に育つであろう。

この研究仮説に基づき、図1のように研究を構想した。

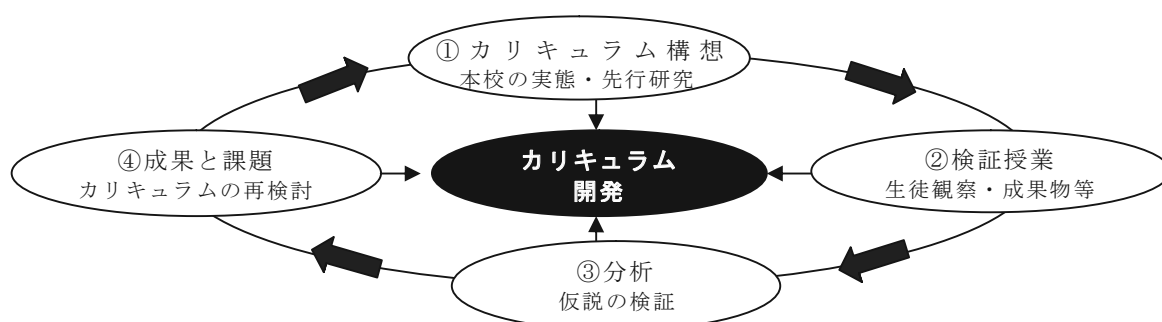


図1 研究構想図

「①カリキュラム構想」では、本校の実態を念頭に置きながら先行研究から学び、研究仮説に基づく授業や評価方法を検討した上で、単元構成を考え学習指導案を作成する。「②検証授業」では、学習指導案をもとに、御坊市立河南中学校（以下本校と略記）1年A・B組2クラスで授業を実施し、生徒観察・成果物の評価を中心に検証を行う。「③分析」では、カリキュラムの検証を通して、どのような過程により、社会に参画する意欲や態度が表出してきたのかを分析する。「④成果と課題」では、研究の成果と課題を明らかにしてカリキュラムを再検討する。

以上の研究構想に沿って、カリキュラム開発を行った。

3 カリキュラム構想

カリキュラム開発の基盤となる考えを本校の実態や先行研究から導き、授業方法や評価方法を検討しながら単元構成・学習指導案づくりを行っていく。

（1）本校の実態

本校は、生徒数129名の小規模校であり、生徒は総じて人懐っこいが、挨拶等の基本的な生活習慣の未確立や学力の低下が課題となっている。研究の対象である1年生は、落ち着いた状態で授業に取り組んでいる。校区は、市街地から少し離れた郊外に位置し、田園地帯から海岸沿いまで、様々な産業や生活が見られ、地理的な見方や考え方を身に付けるには、恵まれた地域である。また、本校では市民性を育てる教育の取組を始めたばかりだが、地域の青少年健全育成等の活動が根付いており、授業等で、地域の外部講師を登用するなど、地域連携の活動も行われている（注7）。

このような本校の実態から、地域の人材を活用し、聞き取り調査を中心にした、フ

ィールドワークによる「身近な地域の調査」学習を構想する。そして、本校の課題の1つでもあり、社会参画には不可欠なコミュニケーション能力を高めるために、班学習を取り入れていく。

(2) 市民的資質の視点からの構想

「身近な地域の調査」学習の授業を具体的に構想するため、市民的資質の視点から構想する。市民的資質とはよりよい社会の形成に参画しようとする態度や能力のことであり、社会認識を基盤にして育成される。

表 1 社会認識・市民的資質の構造と本単元での学習活動の関連

社会認識と市民的資質		発問と学習活動	本単元での学習活動
市民的資質	社会的実践 (関わること)	D o の発問 (「何をするか」と問い、実際に社会と関わる活動)	
	意志決定 (判断すること)	W h i c h の発問 (「どうすべきか」と問い、望ましい社会的行為を選択・決定する活動)	自分たちに何ができるか選択・決定する
社会認識	価値認識 (解釈すること)	W h y の発問 B (「なぜ善いのか」と問い、社会的事象の意味・意義を解釈する活動)	自分たちの地域の実態を理解する
	関係認識 (説明すること)	W h y の発問 A (「なぜなのか」と問い、社会的事象間の関係を説明する活動)	調査学習によって課題を明らかにする
	事実認識 (わかること)	H o w の発問 (「どのように」と問い、社会的事象の構造や過程を調べまとめる活動)	新旧地形図の比較から地域の変化を読み取る
	事実認識 (知ること)	W h a t の発問 (「何が」と問い、個別の情報を求める活動)	地形図の読み取り方を知る

松岡尚敏 『平成 20 年版学習指導要領と社会科授業改善の視点 (2) - 社会科授業における「わかる」「考える」再考 -』 宮城教育大学紀要第 44 巻 p.34 (2010) に基づき作成

松岡(2010)は、授業の設計や実践の際に、「社会認識」の段階を「事実認識・関係認識・価値認識」と捉えている。そして、社会認識の上に成り立つものとして「市民的資質」を「意志決定・社会的実践」と捉えて段階的に設定している。この段階にそって「身近な地域の調査」の学習活動を示してみる。(表 1 参照)(※6)

「地形図の読み取り方を知る」を事実認識(知ること)、「新旧地形図の比較から地域の変化を読み取る」を事実認識(わかること)、「調査学習によって課題を明らかにする」を関係認識(説明すること)、「自分たちの地域の実態を理解する」を価値認識(解釈すること)として社会認識を段階的に高める学習を進める。その上で、「自分たちに何ができるか選択・決定する」を意志決定(判断すること)として、市民的資質の育成に取り組む。社会的実践については、総合的な学習の時間や特別活動にカリキュラムをつなげていくことで実現する。

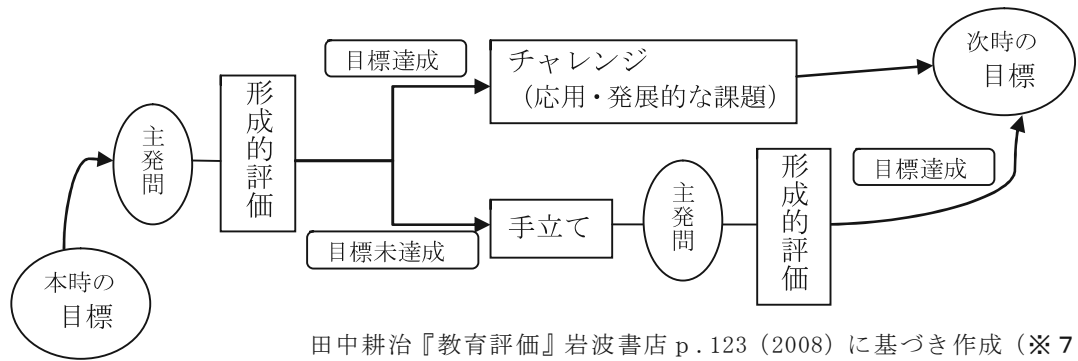
(3) 形成的評価を生かす授業の流れ

社会認識の形成と市民的資質の育成を段階的に進めて行くためには、各段階の学習目標を明確に示した発問が重要である。そのためには、評価を目標に準拠させておきたい。指導者も学習者も目標を達成した状態を具体的に理解できるからである。したがって「目標に準拠した評価」は、学習過程の習熟度を踏まえるために活用する形成的評価において特に有効である。形成的評価に基づく授業の流れは以下の通りである。

【形成的評価を生かす授業の流れ】

主発問による生徒の活動について形成的評価が行われ、その情報はすぐにフィードバックされる。目標が達成されれば、応用・発展的な課題に取り組ませることとなり、達成されてなければ生徒への手立てや授業計画の修正が行われる。その結果を、もう一度形成的評価により確認し、全員が目標に到達したと判断できれば次時の授業に向かう(図 2 参照)。

形成的評価を実施することで、指導者は指導上の課題が把握しやすくなり授業改善を促進できる。したがって、本時の目標に準拠した評価を明確に示す主発問を活用することで、生徒にとっては、目標と（形成的）評価が重なり、しかも明確になることで見通しを持って学習することができる。



田中耕治『教育評価』岩波書店 p.123 (2008) に基づき作成 (※7)

図2 形成的評価を生かす授業の流れ

(4) 指導・観察・検証の体制

社会科教科担任とともに学級の実態に即して学習指導案を共同作成した。そして、学習指導案をもとに社会科教科担当が授業者、筆者が授業者補助として授業を行った。授業の検証は、授業者、授業者補助による生徒観察、VTRでの授業記録、ポートフォリオ、授業者へのインタビュー、発表会に参加した保護者等のアンケート、聞き取り調査対象者へのインタビュー等で行った。

4 カリキュラムの検証

以上のカリキュラム構想を基にして単元の各授業を実施した。各授業は、「本次の目標に準拠した評価」が明確になる主発問と指示を中心に置いた (表2 参照)。

表2 単元構成と主発問・指示

単元構成	主発問・指示
第1次 地形図の読み取り方 地形図の読み取り方を理解する	「御坊市の地形図から何がわかるか。」
第2次 新旧地形図の比較 地域の変容を知る	「新旧の地形図を見比べて、どこが、どのように変化したのか。」
第3次 テーマ・課題設定 適切なテーマを設定し課題を導き出す	「なぜ、そのような変化がみられたのだろうか。」
第4次 調査計画 調査方法を学び、聞き取り調査や野外観察の計画を立てる	「課題解決のためには、どのような質問をすればよいのか。」
第5次 フィールドワーク 校外に出て野外観察と聞き取り調査を行う	「聞き取り調査と野外観察によって、課題解決に迫ろう。」
第6次 考察とまとめ 課題を考察し、その経過をまとめる	「フィールドワークの成果から、仮説の検証を行い、課題解決に迫ろう。」
第7次 社会参画に向けて 地域の将来像から新たな課題に迫り、自分たちは何ができるのかを提言する	「将来像を考えよう。そのときの課題になりそうなことは何だろう。根拠もつけて述べてみよう。」 「その課題克服のために、今からできることは何だろう。また、将来できそうなことは何だろう。」
第8次 発表会 発表会から得たことを振り返り自分の意見を表明する	「発表会を振り返り、もう一度自分たちにできることを考えてみよう。」

(1) カリキュラムの流れ

「第1次 地形図の読みとり方」では、「国土地理院 御坊 25000 分の1 地形図（平成 17 年発行）」により、地図記号・縮尺・方位等、地形図の読み取り方を学習させた。

「第2次 新旧地形図の比較」では、平成 17 年発行と昭和 43 年発行の地形図を比較させた。地形図上で新しくできたもの、変化したもの、なくなったものを判別し、その内容を付箋に記し貼り付けさせた。

「第3次 テーマ・課題設定」「第4次 調査計画」では、班での話し合いを通じて調査項目について意見をまとめさせ、次のように調査の手順の明確化を図った。

【調査手順】

テーマ・課題設定→仮説の提示→聞き取り対象者の選定→質問作成→返答予想→ルートマップ作成

「第5次 フィールドワーク」では、実際に沿岸部を中心とした校区に出て聞き取り調査に取り組んだ。班ごとの調査内容のテーマは以下の通りである。

【調査テーマ】

「砂浜が漁港に変わった!？」「なぜ、塩屋に閑電が?」「日高港湾と塩屋地区の関わり」「王子川の謎」「エコ系な建物について」「消えた海水浴場」「塩屋地区にお菓子屋さんが多い理由」「川と川の境目」「閑電による町の変化」「河南中学校の位置の謎」「ごんげんいそ（権現磯）がなくなった」

「第6次 考察とまとめ」では、聞き取り調査から得た情報で、模造紙に地図や資料、グラフ等を用いてまとめ、仮説が妥当であるか話し合った。

「第7次 社会参画に向けて」では、調査結果を基に地域の将来像と課題を考え、自分たちができることを話し合った。

「第8次 発表会」では、調査した項目について資料を使って説明し、自分たちの調査内容を解釈し、仮説の検証について述べた。そして、地域の将来像や課題を示し、自分たちができることについて発表した。他の班の発表は所定の用紙にメモを取り、発表会後に自分の考えをまとめ、感想文を書いた。

(2) 授業分析（抜粋）

資料1 検証授業第7次 社会参画に向けての学習指導案

① 本次の目標

- これまでの学習や前時のレポートを基に、あるべき地域の将来像や新たな課題にせまり、自分たちは何ができるのかを考える。
- 未来に向けて提言できる内容を盛り込んだ発表資料を作成する。

過程	指示・発問	生徒の活動	評価	教材・資料	備考
展開	主発問前段 【Whyの発問B】 「将来像を考えよう。そのときの課題になりそうなのは何だろう。根拠もつけて述べてみよう」	【活用B】 レポートをもとに、今までの調査活動を振り返る。 一人ひとりが考えた将来像に根拠をつけて話し合い、班としての将来像を創り上げる。 将来像（未来）が築かれる上で、課題となることを考え、まとめる。	【価値認識（解釈すること）】 今までの調査活動を基に、具体性のある根拠に基づく将来像や課題を考えることができる。 （思考・判断） [C評価]地域調査の成果とのつながりが見えなくて、根拠に乏しい現実味のない将来像になっている、あるいは、悲観的な見方に傾きすぎている。 ↓ [手立て] レポートやポートフォリオの見直しを指示する。悲観的な見方になっている班については、聞き取り調査票の見直しを指示し、地域の人たちの生活や努力している面を見つめさせる。	ポートフォリオ レポート 他の班のレポート 下書き用発表用紙 発表原稿	班学習 できるだけ明確な将来像を考えさせる

ここで、「第7次 社会参画に向けて」の授業分析を示す。資料1は学習指導案の一部である。授業では、「これまでの学習や前次のレポートを基に、地域の将来像や学習によって明確化された新たな課題にせまり、自分たちは何ができるのかを考える。」という目標に向けて、「将来像を考えよう。そのときの課題になりそうなことはなんだろう。根拠もつけて述べてみよう。」という、価値認識（Whyの発問B）に関わる主発問（表1参照）を行った。

本次の学習のポイントは、「具体的な根拠に基づく」ことであり、この点について形成的評価を行った。その結果、全く根拠に基づかない将来像や課題はなかったが、具体性に乏しく、調査内容が十分に反映されていないものも見られた。そこで、主発問を再び行い、根拠を見いださせた。ただし、地域の方からの聞き取り内容をそのまま自分の意見として述べている場合もあり、自分自身の考えを深めさせることに課題が残った。第7次の授業のはじめには、将来像を考えることが「難しすぎる」との声もあがったが、振り返りシート「具体的な根拠に基づく将来像を考えることができた」の自己評価では、「a：不十分」と答えた生徒は1名のみであった。また、期末テストの「地域調査に基づく将来像を答えさせる問題」では、無解答0%、完全正答者の比率が85%、部分正答者の比率が15%という結果であった。

（3）生徒の学習状況について

生徒の学習状況全般について、「ア 振り返りシート」「イ 調査学習についてのアンケート」の2項目に分けて分析し考察を加える。

ア 振り返りシート

資料2は、各次の授業の最後に行った自己評価のための振り返りシートの一部である。この中の評価項目「①今回の学習に意欲的に取り組んだ。」及び「②今回の学習の内容が理解できた。」について第1次から第8次の回答のグラフ化を行った（図3）。グラフ化にあたり、自己評価の「a：十分できた」を4点、「b：できた」を3点、「c：どちらかと言えばできた」を2点、「d：不十分だった」を1点として点数化した。

資料2 振り返りシート（一部抜粋）

第5次 フィールドワーク		
今日の授業の目標…適切な聞き取り調査や野外観察を行い、課題解決に迫る。		
(1) 今日の授業を振り返ってみて、自己評価してみよう。		
a：十分にできた b：できた c：どちらかと言えばできた d：不十分だった		
項	目	自己評価
①	今回の学習に意欲的に取り組んだ。	
②	今回の学習の内容が理解できた。	
③	聞き取り調査の相手の方としっかりとコミュニケーションがとれた。	
④	問題解決に迫る聞き取り調査ができた。	
⑤	野外観察でいろいろな発見や確認ができた。	
⑥	調べたことをしっかりと記録した。	
⑦	交通安全に気をつけて、マナーを守ることができた。	
(2) 今日の学習でわからなかったことや質問があれば、書いてみよう。		
(3) フィールドワークの感想を書いてみよう。		

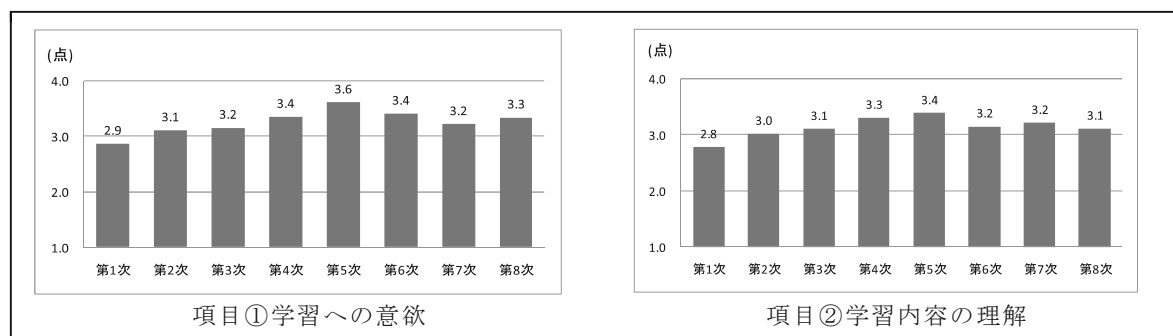


図3 各次における項目①・②の平均点数

図3は、評価項目①②について第1次から第8次のそれぞれの点数の平均値を表している。平均値が3点を下回ったのは第1次のみであり、全体的に見れば概ね意欲的に取り組み、理解できたと考えられる。また、「第5次 フィールドワーク」の地域の人とふれ合う体験的な学習が、最も意欲的に取り組み、最も理解できたという結果となった。

これは、日頃あまり経験したことがない地域の方との直接対話がもたらした成果だと考えられる。第5次振り返りシートからは、聞き取り調査がしっかりとできたという生徒の充足感が、見てとれる(図4)。その背景には、資料を準備し、熱い思いを生徒に語ってくれた地域の方々の非常に熱心な協力があつた。

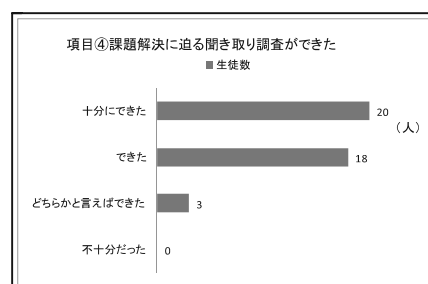


図4 第5次振り返りシートによる自己評価

イ 調査学習についてのアンケート

調査学習を行うにあたり、生徒の意識や態度や生徒にとって必要と思われる力に沿って、15項目を設定した(表3)。そして、調査学習の事前と事後に学年生徒(46名)を対象に記名アンケートを行った。各項目の回答について、「a：とてもそう思う」を4点、「b：そう思う」を3点、「c：どちらかと言えばそう思う」を2点、「d：そう思わない」を1点として点数化し、集計した。その結果から、45点～60点(平均3点以上)をA群、30点～44点(平均2点以上、平均3点未満)をB群、15点～29点(平均2点未満)をC群に分類した。

表3 調査学習についてのアンケートの項目

- ①身近な地域の調査学習について「やってみたい」「やってみよう」と思う。
- ②自分の力で調べたり活動したりする。
- ③新しいことにチャレンジしようと思う。
- ④色々なことに「なぜ」「どうなっているの」などの疑問をもっている。
- ⑤自分の考え方や学び方について他の人と比べている。
- ⑥情報を集めるためにいくつかの方法を考えようとしている。
- ⑦目的に応じて必要な情報を選ぶことができる。
- ⑧集めた情報に対して自分の考えをもつことができる。
- ⑨自分の考えを自信をもって言うことができる。
- ⑩自分の考えをわかりやすく伝える工夫をしている。
- ⑪相談して何かを進めることが楽しく感じる。
- ⑫地域や学校で大人とあいさつや会話をしている。
- ⑬人に対する話し方や聞き方に気を配っている。
- ⑭まわりの人々の生き方や仕事に関心をもっている。
- ⑮社会や身近な人のためにできることをしたいと思う。

表4 調査学習アンケート分類表

	事前人数 (平均点)	事後人数 (平均点)	(事前の群の人数)
A群	9名 (47.9)	17名 (49.0)	(A5名・B10名・C2名)
B群	25名 (36.2)	27名 (37.7)	(A4名・B15名・C8名)
C群	12名 (24.7)	2名 (22.0)	(C2名)
	計46名 (35.5)	計46名 (41.2)	

表4は、上記の分類に基づき、事前と事後の各群の人数とその平均点を示したものである。さらに事後の各群については、事前にどの群に属していたかの人数を示

し、変化を読み取れるようにした。事前アンケートでは、A群に9名（19.6%）、B群に25名（54.3%）、C群に12名（26.1%）であった。事後アンケートでは、A群に17名（40.0%）、B群に27名（58.7%）、C群に2名（4.3%）となった。A群は8名、B群は2名の増加が見られ、C群は10名減少した。回答者の総得点の平均点は、事前35.5点から事後41.2点へと、5.7点の増加が見られた。

次に、事後の各群別に分析し考察を行う。

A群

事後の17名は、A群のままが5名、得点が増加しB群からA群に移動したのが10名、同じくC群からA群に移動したのが2名であった。

A群に移動した生徒の振り返りシート（資料2）の感想には、「フィールドワークをやって良かった」という内容が多かった。ある生徒は、第1次「計算できない、難しい」、第3次「仮説を書く意味がわからない」という消極的な感想から、第5次フィールドワークでは、「話を聞いて本当に良かったと思った。」に変化した。また、その生徒の自己評価は、「c：どちらかと言えばできた」がほとんどであったが、第5次フィールドワークと第8次発表会では、「b：できた」に変化した。さらに、聞き取り調査で「中学生は、会釈ぐらいしてほしい」という言葉を聞き、「これからは町の人に会ったらきちんと会釈する」と感想文に書いた。この生徒は、聞き取り調査で地域の方と関わることによって多くの影響を受け、学習への意欲や態度を高めていったと考える。このような例は、振り返りシートや感想文等の分析から、多くの生徒に見受けられる。

B群

事後27名は、得点が減少してA群からB群に移動したのが4名、B群のままが15名、得点が増加しC群からB群に移動したのが8名であった。

B群の生徒の振り返りシートの感想には、「班学習がわかりやすく楽しい」という内容のものがみられた。例えば、C群から移動した8名の生徒は、自己評価の点数において、全項目の平均値ではそれ以外の生徒を下回っているのだが、班学習に関わる項目だけは、0.1点上回っている。このことから、C群からB群に移動した大きな要因が班学習であると考えられる。図5は班学習に関わる項目を各次別に、C群からB群に移動した生徒（8名）とそれ以外（19名）の生徒を比較したものである。C群からB群に移動した生徒は、第2次「新旧地形図の比較」、第6次「考察とまとめ」、第7次「社会参画に向けて」で点数が高く、第3次「テーマ・課題設定」、第4次「調査計画」で点数が低くなっている。第2次、第6次、第7次は、班での活動や資料作成等の作業を取り入れた授業である。事前でC群だった生徒は、班での活動を通じて調査学習の力を身に付けていき、事後のアンケート結果の得点の増加に結びついたと考えられる。

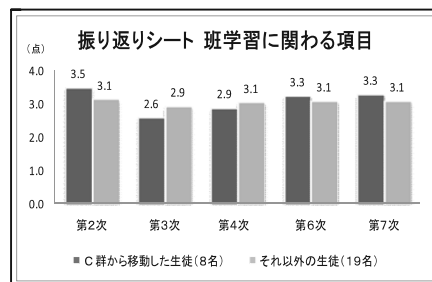


図5 振り返りシート 班学習に関する項目の平均点比較

C群

C群のままの生徒2名の内の1名は、観察者から見て班内ではリーダー的な役割を果たしており、感想文で社会参画に関することや、振り返りシートの感想等もしっかり書けていた。日頃から本人は学習に対する意識や目標が高いことから、自身の今回の学習活動に十分満足できていなかったと思われる。

もう1名は、振り返りシートにおいて前向きな感想や、感想文において社会参画のキーワード等を記している。しかし、振り返りシートの班学習に関する項目で「不十分だった」がいくつかみられた。もう少し、本人にとって班学習が充実したものになっていれば、調査学習に対する理解や意欲が向上したと考えられる。

（4）社会参画の意欲と態度について

第8次の発表会後の振り返りシート「地域のために何かしたいと思う」の、生徒数44人中「とてもそう思う」15人（34.1%）、「そう思う」23人（52.3%）、「どちらか

と言えそう思う」6人(13.6%)、「そう思わない」0人という結果がでている(図6)。生徒は、何らかの形で社会参画しようとしていると考えられる。

では、生徒の考える社会参画がどのようなものなのか、発表会後の感想文から社会参画に関わるキーワードを抜き出し、次の2点に注目した。一つは、具体的な行動を書いているもの、もう一つは、社会参画の意欲と態度について書いているものであり、前者を「①よりよい社会をめざす行動」、後者を「②地域とつながりを持とうとする気持ち」に大別した。

「①よりよい社会を目指す行動」には、例えば「ポイ捨てしない」「電気の無駄づかいをしない」「リサイクル」等が入り、「②地域とつながりを持とうとする気持ち」には、「あいさつ」「ふれ合い」「行事に参加する」等が入る。①②の両方のキーワードが感想文から読み取れた生徒は23名であり、①のみ15名、②のみ8名であった。

生徒の社会参画のキーワードの①②のグループのうち、「①より良い社会をめざす行動」の内訳を見てみると、「環境美化」「環境保全(エコ活動)」について書いている生徒が、31名(67.4%)と多い。「環境」に関わる問題は、大切なものではあるが、身近で誰もが思いつく問題でもある。また、そのキーワード自体も「ポイ捨てしない」や「電気のムダ使いをしない」など、表面的であまり深く考えられていない。より一層、調査学習を活かし、地域の実態と結びつけた社会参画を生徒が考えられる工夫が必要である。

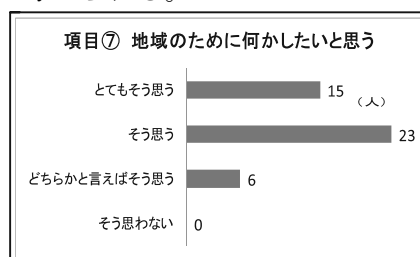


図6 第8次振り返りシートによる自己評価

5 研究のまとめ

(1) 成果

社会参画を視野に入れ、地域の課題や将来像を考え、さらには自分たちにできることを考えさせるカリキュラムにより、社会参画の意欲と態度が育てられたと考える。

感想文における社会参画のキーワードから、生徒たちの「よりよい社会の形成に向け、主体性をもって社会に積極的に参加し課題を解決していこう」という意欲と態度が垣間見えた。まだまだ具体性が十分でなく、本人独自の発想が少なく、稚拙だと感じる表現も多い。しかし、これから社会について勉強する中学1年生にとって、自分の言葉で「より良い社会をめざす行動」や「地域とつながりを持とうとする気持ち」を表現したことの意義は決して小さくはなく、その中に社会参画の意欲の表れを見てとれたと考える。

社会参画の意欲や態度の育成は、社会認識の形成を土台としている。本単位では、調査により地域の課題を明らかにし、実態を理解することが基盤となっている。今回の研究では、その調査による社会認識の形成において、聞き取り調査の有用性が非常に高かったと考える。聞き取り調査では、地域の良さや課題を理解するだけでなく、地域の人との交流が生徒にとって刺激となり、新たな発見が生まれ、様々なことを考える契機となる。また、あいさつや会話などのコミュニケーション自体が、社会参画に向けての予行練習となり得る。これは、調査による社会認識の形成だけにとどまらず、市民的資質の育成、社会参画の意欲や態度の向上へと結びつく。本研究では、聞き取り調査に協力していただいた方々が、非常に熱心に生徒とのコミュニケーションをはかり、それぞれの思いを伝えてくれたことが、生徒の社会参画の意欲や態度につながり、生徒の感想文におけるキーワード、「あいさつ」「ふれ合い」「地元に残りたい」等にあらわれたと考える。

また、班学習による学びが、本単位では有効である。班学習で話し合うこと自体が、地域とつながる上で、必要不可欠なコミュニケーション能力を育む貴重な経験になった。さらに、班学習による協同的な学びにより、生徒全員が本時の目標を達成し次時の授業に向かうことができた。なお、今回の班学習を効果的に行わせることができた

のは、目標に準拠した評価を明確に示す主発問を活用する学習展開によるところも大きい。指導者が目標に向けてぶれることなく指導できたとともに、生徒も見通しをもって活動、学習できたからである。

（２）課題

社会参画の意欲や態度の評価は、評価規準の設定等で困難な点がある。授業者には周到な準備が必要であり、授業を積み重ねることで、より適切な評価規準を設定することが大切になってくる。本研究では、発表会後の感想文を中心にポートフォリオと、それまでの生徒観察によって社会参画の意欲・態度を評価した。感想文を評価する際には、生徒の国語力で内容が左右されるため、十分注意し慎重に評価する必要がある。

社会参画の意欲や態度をさらに高めていくために、生徒たちの学習内容、とりわけ調査内容のさらなる充実が必要である。本研究では、1年生での授業となったが、来年度からは2年生の最後の地理的分野のまとめとして、「世界の様々な地域の調査」や、「日本の諸地域」で学んだことを生かしながら「身近な地域の調査」が行われる。このため、より深い社会認識に基づいた調査を行うことで、より高い公民的資質、社会参画の意欲や態度の育成につながるものと思われる。

社会参画の意欲や態度を行動化するためには、社会科の授業だけで取り組むのではなく、総合的な時間や特別活動などで、地域に貢献する取組や地域に参画する活動を設定することが考えられる。また、それぞれの学校の特色のある実践を、市民性を高める教育の視点で捉え直してみることで、社会参画の行動化へ近づけるための手立てとなるはずである。

〈注釈〉

注1 広辞苑では、「参画」を「計画（の立案）に加わること」とする。本研究では、「参画」を中教審が課題として指摘している以下の下線部と考える。

「将来の社会を担う子どもたちには、新しいものを創り出し、よりよい社会の形成に向け、主体性をもって社会に積極的に参加し課題を解決していくことができる力を身に付けさせることの重要性が指摘されている。」文部科学省中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』p.79（2008）

注2 タイラー（Tyler, R. W.）の定義によれば、教材と教授法の両方を含む教育プログラムを作ることである。カリキュラム開発という言葉自体は、このプログラム作成に当たって、一見複雑で、非合理的に思われる一連の過程を、よりシステマ的なプロセスによって可能にするという意図が含まれている。今野喜清他編『新版 学校教育事典』教育出版株式会社 p.154（2003）

注3 読売新聞社全国世論調査（2010/07/17～18）によると「地域住民の支え合いが弱くなってきている」という回答が78%を占めた。読売新聞社朝刊「希薄化する「地縁」「血縁」意識」（2010/08/18）

注4 諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』中公新書ラクレ（2005）や門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書（1999）他多数の著作からもうかがえる。

注5 Benesse 教育研究開発センター『放課後の生活時間調査－調査クローズアップ！「注目データで見る子どもの生活時間第3回」－』（2009）

注6 「社会科の授業でフィールドワークなどの学校外での体験的な学習時間を何時間くらい行っていますか。」という問いに対して、0時間が45.0%、1時間以上40.1%、無答・不明が14.9%という結果となった。Benesse 教育研究開発センター『中学校の学習指導に関する実態調査報告書』（2009）

注7 本校の平成21年度末反省や本校の小冊子『河南中学校の「市民性を育てる教育」』（2009）による。

〈引用文献〉

※1 文部科学省中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』p.9（2008）

※2 和歌山県教育委員会『和歌山県教育振興基本計画』pp.26-28（2009）

※3 文部科学省『中学校学習指導要領』p.34（2008）

※4 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』pp.57-58（2008）

※5 唐木清志『子供の社会参加と社会科教育』東洋館出版 pp.37-38（2008）

※6 松岡尚敏『平成20年版学習指導要領と社会科授業改善の視点（2）－社会科授業における「わかる」「考える」再考－』宮城教育大学紀要第44巻 p.34（2010）

※7 田中耕治『教育評価』岩波書店 p.123（2008）